

国立国語研究所学術情報リポジトリ

A contrastive study of honorifics toward the third person of working members of society in Japan and Korea : Based on a questionnaire survey

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金, 順任, KIM, Soonim メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002147

日韓の社会人における第三者敬語の対照研究

——アンケート調査の結果から——

金 順任

キーワード

第三者敬語, 絶対敬語, 相対敬語, 圧尊法, 第三者敬語の聞き手敬語化

要 旨

本稿は日韓の社会人を対象としたアンケート調査を用い、日韓の第三者敬語運用のメカニズムの一端を実証的に明らかにすることを目的としている。

分析の結果、聞き手が同等か目下の場合、日本語では第三者敬語はあまり使われないが、韓国語では第三者を高める割合が高く、絶対敬語を基調としていること、その一方で、親族に対する敬語使用においては相対敬語的な一面があることが明らかになった。

さらに、日韓に共通してみられる動向として、最上位者の前で上位者に対し尊敬語を用いる傾向が強く、第三者も聞き手も両方高めてしまう新しい敬語法が使われており、このような傾向は、男性よりは女性、40代・50代よりは20代・30代で顕著であった。第三者敬語と聞き手敬語の相関関係については、日本語のほうが、聞き手と第三者を同時に高める「第三者敬語の聞き手敬語化」が顕著であることが明らかになった。

1. 研究目的

本稿は日韓の社会人を対象としたアンケート調査を用い、日韓の第三者敬語運用のメカニズムの一端を実証的に明らかにすることを目的としている。

敬語使用に影響を及ぼす要因としては、年齢、性別、方言、社会的地位、話者の意図のような話し手自身と関わる要因や、親疎関係、発話時の心理的・感情的関係など、話し手と聞き手との関係に関わる要因などがあり、それら様々な要因が影響し合い、言葉が発せられる。しかし、実際の言語運用においては、話し手や聞き手だけではなく、もう一人の人物、すなわち、話題に上る第三の人物（第三者）が登場する場合もしばしばある。このような場面になると、話し手は、話し手と第三者との関係及び、聞き手と第三者との関係も同時に考慮しなければならないが、すぐさま、その状況を把握・判断するのが困難なこともある。このような言語づかひの選択における「困難さ」は「言葉のゆれ」を生み出し、「言葉のゆれ」が「言葉の変化」に繋がる。韓国語における絶対敬語、相対敬語の問題もまさに、今「進行中の変化」だと筆者は考えている。

この「絶対敬語」、「相対敬語」という問題は第三者敬語について考える場合に重要な問題点である。本研究では、日韓の社会人を対象に、第三者に対する敬語使用が聞き手によって相対的に変わってくるかどうか、さらには、第三者による違いはあるかどうかという問題を日韓両言語において検証することを目的とする。

2. 先行研究

近年社会言語学的観点からの日韓両言語の対照研究は数多く行われているが、これらの研究の大半は現在の使用実態に注目したものが多く、通時的な観点からの言葉の変化に注目したものはそれほど多くはないと言っても過言ではない。

「絶対敬語」について、辻村(1992)は、「古代においては、同一の対象については人称・場面の如何に関わらず、常に一定の敬語を用いた。つまり絶対的な用法であった」(p.592)と述べている。これに対し、「相対敬語」とは、金田一(1992)によると、『父様』『母様』も、言う相手によっては単に『父が』『母が』若しくは、かえて『愚父』『愚母』とさえも言うことがあって、全く相手によって相対的に用いる敬語である。相対敬語と呼ぶわけである」(pp.307-308)とされている。つまり、第三者と聞き手の関係によって左右される敬語を「相対敬語」と呼んでいる。

これに対し、韓国語は現代においても第三者が身内であっても目上の人であれば必ず敬語を使わなければならないという「絶対敬語」の性格が強いとされている(梅田 1987)。しかし、その絶対敬語の中に相対敬語的な面があることを指摘した先行研究も多く(韓美卿 1982, 신혜경 1993, 이정복 1994など)、一言で韓国語は「絶対敬語」であると言い切ることはできない。すなわち、高めるべきと言われている第三者を常に高めるのではなく、対面している聞き手との親近感や聞き手に対する配慮から第三者に対して敬語を使用しないことも起こるようになったといえる。

日韓の第三者敬語の対照研究としては、先駆的研究に荻野他(1991)がある。授受動詞を用いたアンケートを行い、動作主と動作の受け手による第三者敬語(尊敬語や謙譲語)の使い分けについて詳しく考察されている。しかし、荻野他(1991)では、第三者としては、日常接する人物(被調査者自身、父親、学長、先生、上級生、同級生)を想定しているが、聞き手としては先生の場合と親しい友人の場合の二通りしか設定しておらず、聞き手による第三者敬語使用の変化が十分に捉えられているとはいえない。また、調査対象が大学生に限られている点に問題がある。なぜなら、大学生の敬語運用力は社会人のそれよりも低いと考えられるし、また高年層の使用法とも異なる可能性があるからである。

3. 調査の概要と分析方法

3.1. 調査方法

本稿では調査方法としてアンケート調査を用いた。アンケート調査については使用実態調査ではなく、意識調査にすぎないという批判もある。しかし、実際の会話から大量の第三者敬語のデータを得ることの困難さを考え、本稿ではこの方法を採用することにした。

アンケート調査は韓国では2002年8月から9月にかけて、日本では2002年9月に1次調査を行い、11月に追加調査を行った。また、回答方式としては、選択式も考えられたが、予備調査で多少困難さを感じるという意見があったため、自由記入式にした。

3.2. 被調査者

被調査者は日韓でできるだけ条件を統一するために、同類の職業の人を対象にしようと考えた。放送業に携わっている人¹を対象に、韓国では190名、日本では47名のデータを収集した。日本人のデータが十分ではなかったため追加調査が必要となり、大学の一般事務員を対象に追加調査を行った結果、日本については最終的に合計91名のデータが得られた。以下の表1は男女別・世代別の被調査者の数である。

表1 被調査者の属性

		20代	30代	40代	50代	小計	合計
日 本	男	4	16	17	22	59	91
	女	6	12	8	6	32	
韓 国	男	8	47	28	33	116	190
	女	25	27	19	3	74	

男女別・世代別の被調査者の数が均等ではないため、分析には注意が必要である。女性の被調査者が少ないことは、対象とした職種に女性の従事者が少ないこと、韓国の20代の男性が少ないのは、徴兵制度のため社会人となる年齢が高くなる傾向があることとも関連する。被調査者の数が十分ではないが、ここでは大まかな傾向をみることに主眼を置くため、世代は大きく20代と30代を合わせたグループと、40代と50代を合わせたグループの二つに分けて考察を行なうことにする。

3.3. 質問文の内容

調査で設定した3つの場面や、人間関係について、表2に詳しく示す。

「身内の言及」の場面では「父」、「工作中」では「課長」、「会社外」では「上司」、「年下の上司」、「年上の部下」を第三者として設定した²。聞き手としては、「部下」、「同僚」、「上司」を設定し、それぞれ親疎の2つの場合を設けた。しかし、親疎差に関しては、今回の報告では大まかな日韓の比較を行うために、一部を除き言及しない。

「工作中」の場面で、第三者が「課長」の場合は、聞き手に「上司」のかわりに、「同じ部署の部長」（部長）や「他部署の課長」（他・課長）、「外部からの客」（客）といったより具体的な相手を設定し、会社内部でのウチソト意識の有無を調べることを試みた。

「会社外」の場面では、第三者として「上司」「年下の上司」「年上の部下」の3種を設定した。「上司」には年齢の条件を付け加えていないが、おそらく多くの被調査者は、「年上の上司」を想定したものと考えられる。また、この場合は、聞き手として、第三者である「上司」の同僚（上司の同僚）や、第三者である「上司」のさらに上司（上司の上司）を設け、「第三者敬語の聞き手敬語化」や韓国の伝統的な敬語法である「圧尊法」の運用について考察ができるように考慮した。

表2 調査した人間関係と質問文の内容

場面	第三者	聞き手	設定した質問文
身内の言及	父	部下（親・疎） 同僚（親・疎） 上司（親・疎）	あなたがはめている時計を見て、会社の人が“時計、格好いいね。どうしたの？”という内容のことをあなたに聞きました。あなたが“父（親）が旅先で買ってきた。”という内容を伝えたい場合、「 <u>買ってきた</u> 」のところをどのように言いますか。
仕事中	課長	部下（親・疎） 同僚（親・疎） 部長（親・疎） 他部署の課長（親・疎） 外部からの客	仕事中です。あなたは“課長はいるか？”という内容のことを聞かれました。あなたが“課長は <u>いない</u> 。”という内容を相手に伝えたい場合、「 <u>いない</u> 」のところをどのように言いますか。（話している場には課長はいません。）
会社外	上司	部下（親・疎） 同僚（親・疎） 上司の同僚（親・疎） 上司の上司（親・疎）	昼休みに近くのコンビニエンスストアで買い物をしていたら、偶然会社の人に会いました。あなたが“今度臨時ボーナスが出るらしい。”と話したら、相手から、“なぜ知っているの？”という内容のことを聞かれました。それに対し、あなたが“（第三者の）〇〇が <u>言った</u> 。”と伝えたい場合、「 <u>言った</u> 」のところをどのように言いますか。
	年下の上司	部下（親・疎） 同僚（親・疎） 上司（親・疎）	
	年上の部下	部下（親・疎） 同僚（親・疎の場合） 上司（親・疎の場合）	

ここでいう「第三者敬語の聞き手敬語化」とは、井上(1972, 1999)が指摘したもので、「第三者への敬語が、第三者を敬うためではなく、実は話し相手への敬意を表すために用いられる」という概念である。また、「圧尊法」とは、最上位者の前で上位者である第三者に対する尊敬語使用を控えることを指すが（서정수 1996）、近年はその使用にゆれが多いことが指摘されており、本稿でもこれについて考察を行うことにする。

3.4. 分析方法

アンケート調査は自由記入式で行ったが、分析の際には、日韓の大まかな傾向を捉えるために、自由記述で現れた語形を第三者敬語の有無と聞き手敬語の有無で5つの類型に分類し、考察を行う。以下の表3に分類基準を提示する。

なお、韓国語の聞き手敬語の「敬体」の場合、「해요 hayyo 体」と「합니다 hapnita 体」の二つがあるが、両者の違いは「常体」と「敬体」の差ほど大きいものではないため、本稿では、日本語との比較の便宜も考え、両者を同レベルのものとして扱う。

表3 第三者敬語と聞き手敬語の5類型分類

記号	第三者敬語	聞き手敬語	日本語例文	韓国語例文
- 尊・- 丁	尊敬語不使用	常体	(父が) 買ってきた。	(아버지가) 사 왔다. (apocika) sa wassta.
- 尊・+ 丁	尊敬語不使用	敬体	(父が) 買ってきました。	(아버지가) 사 왔어요. (apocika) sa wasseyo. (아버지가) 사 왔습니다. (apocika) sa wasssupnita.
+ 尊・- 丁	尊敬語使用	常体	(父が) 買っていらしかった。	(아버지가) 사 오셨어. (apocika) sa osyesse.
+ 尊・+ 丁	尊敬語使用	敬体	(父が) 買っていらっしゃいました。	(아버지가) 사 오셨어요. (apocika) sa osyesseyo. (아버지가) 사 오셨습니다. (apocika) sa osyessupnita.
謙讓語使用	謙讓語使用	敬体	(父が) 買ってまいりました。	該当無し ³⁾

4. 結果と考察

まず、全体の結果を表4に示す。なお、前述のように、ここでは大まかな日韓の比較を行うため、聞き手の親疎差については問題にしない。

表4 第三者敬語使用と聞き手敬語使用の日韓比較 (単位 %)

第三者	聞き手	日本語					韓国語			
		- 尊・- 丁	- 尊・+ 丁	謙讓語 使用	+ 尊・- 丁	+ 尊・+ 丁	- 尊・- 丁	+ 尊・+ 丁	+ 尊・- 丁	+ 尊・+ 丁
父	部下	90.1	9.9				21.3	3.2	66.6	8.9
	同僚	82.9	17.1				21.6	3.4	64.9	10.0
	上司	10.2	82.5	6.7		0.6		11.6	3.7	84.7
課長	部下	64.3	24.2	2.7	5.6	3.2	30.3	5.3	54.3	10.1
	同僚	57.6	28.7	3.8	4.5	5.5	36.4	6.1	47.6	9.8
	部長	1.1	43.6	26.5	1.1	27.7	2.4	39.5	0.8	57.3
	他・課長	5.4	42.5	31.5	1.7	18.9	6.4	24.7	3.7	65.2
	客		23.4	74.5		2.2		10.1	2.1	87.8
上司	部下	79.3	9.3	1.1	6.9	3.3	56.1	4.1	34.4	5.4
	同僚	76.5	12.0	1.4	6.3	3.8	59.6	6.3	28.5	5.7
	上司の同僚	8.5	46.5	5.8	10.0	29.1	8.5	28.4	5.4	57.7
	上司の上司	3.0	34.5	15.1	8.2	39.2	3.4	47.9	2.3	46.4
年下の 上司	部下	77.1	10.8	1.1	8.7	2.2	79.2	7.9	10.8	2.1
	同僚	74.7	14.9	1.7	7.5	1.1	78.8	9.1	9.1	3.0
	上司	5.5	50.8	8.4	8.8	26.4	4.9	73.0	2.2	19.9
年上の 部下	部下	85.8	12.2		2.0		79.6	9.6	9.8	1.1
	同僚	82.0	14.7	0.3	2.5	0.5	78.8	11.9	7.9	1.5
	上司	10.5	60.8	18.5	2.4	7.8	3.8	81.2	1.4	13.6

日韓の違いが目立つ箇所は、韓国語のほうが尊敬語の使用が多い点、また、日本語は第三者が「課長」の場合、謙譲語使用が多い点であることが分かる。

以下4.1.では、第三者別に分けて日韓の比較を行う。

4.1. 場面差

4.1.1. 身内の言及

まずは、「父」のことを会社の人にどのように言及するかについて、3種の聞き手別の使用率を図1に示した。

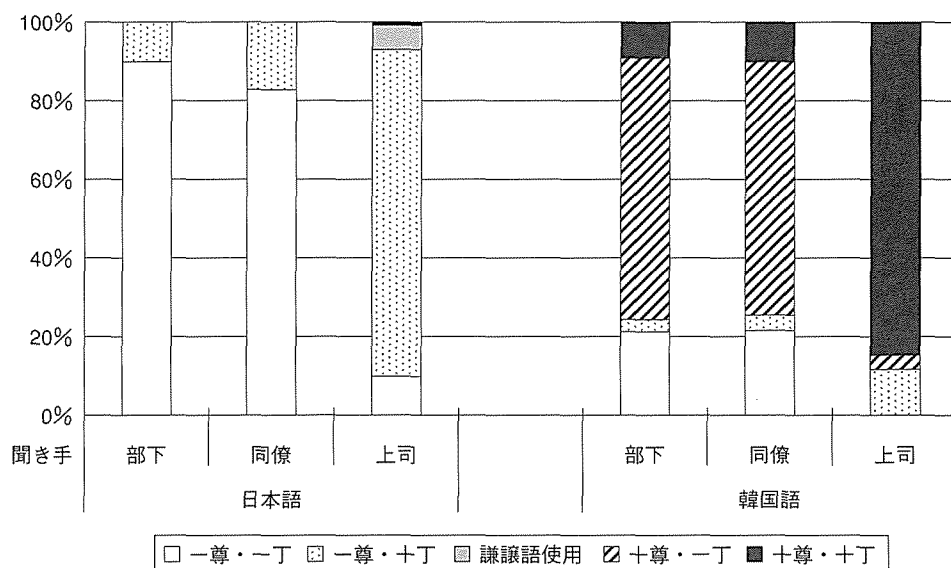


図1 第三者が「父」の場合の日韓の聞き手別使用率

図1をみると、日本語において第三者敬語はまったく使われず、聞き手敬語のみがその使用率を変動させていることが分かる。具体的には、聞き手が「部下」や「同僚」の場合は「-尊・-丁」が、聞き手が「上司」の場合は「-尊・+丁」が多用されている。これに対し、韓国語においては、第三者である「父」を高める割合が高く、「部下」や「同僚」に対しては「+尊・-丁」, 「上司」に対しては「+尊・+丁」が最も多く使われている。

荻野他(1991)では、韓国語において「父」は聞き手に関係なく高められているため、絶対敬語的であると述べているが、今回のデータでは、「同僚」や「部下」に対しては「父」を高めない割合が30%近くに及んでいる。これは金順任(2002)の大学生の結果とも符合しており、一般に絶対敬語であると考えられている韓国語が、実際は聞き手によっては第三者敬語を控えることもあるという、相対敬語的な面があることを示しており、今後の敬語の変化について考える上で興味深い事実である。

また、日本語の場合、身内である「父」について言及する際、聞き手が会社の上司など、目上のソトの人物の場合は謙譲語を用いると予想されるが、「謙譲語使用」はあまり高くなく、「上司」に対して10%弱しか使われていないことも興味深い結果である。

4.1.2. 仕事中的場面

次は、第三者が「課長」の場合をみる。聞き手別の使用率を図2として示した。

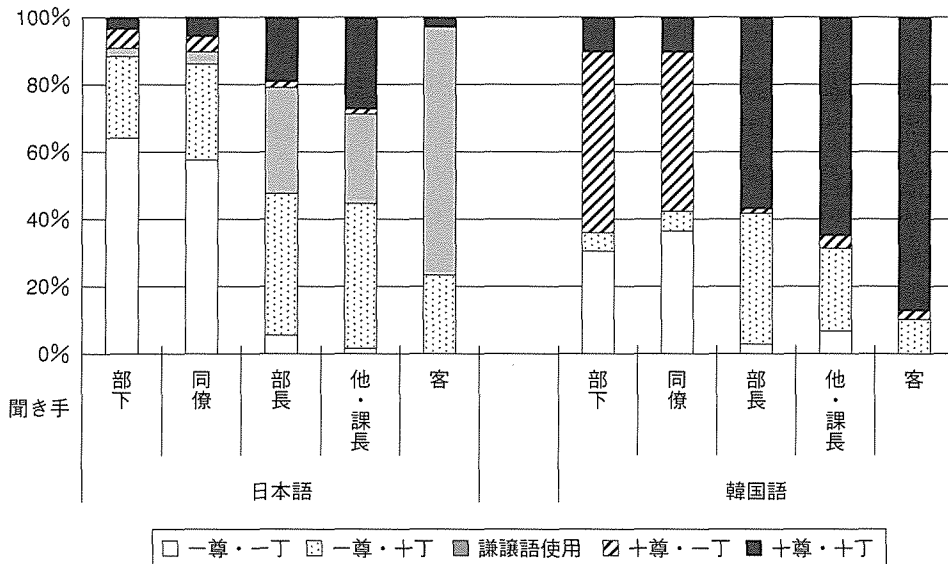


図2 第三者が「課長」の場合の日韓の聞き手別使用率

まず、日韓で目立つ違いは、日本語のほうは大体右にいくほど謙譲語使用が増え、韓国語のほうは尊敬語使用が増えている点である。また、韓国語において「部下」や「同僚」に多用されている「+尊・一丁」は日本語の場合はほとんどないという点も際立った違いといえる。

日本語において、聞き手が「部下」や「同僚」の場合は、第三者に対する尊敬語はほとんど使われておらず、「部長」「他部署の課長」が聞き手の場合にも、それぞれ20%程度、25%程度使われているにすぎない。60%程度尊敬語が使われている韓国語とは大きな違いをみせている。

「部長」を聞き手とし「課長」について言及する際、日本語では最上位者の前で、上位者を低めるか、それとも高めない表現が望ましいとされるが、この点については規範通りの使用がみられた。それに対し、韓国語では、最上位者の前で上位者を低めるという圧尊法が働くことが予想される場面であるが、圧尊法を守っていない「+尊・+丁」の割合が過半数を超えており、規範が崩れているといえる。また、親しい相手に対し、より圧尊法が守られないと予測したが、そのような結果はみられなかった。

次に聞き手が「客」の場合は、前述した通り、日本語では「謙譲語使用」が最も多く、韓国語では「+尊・+丁」が最も多用されている。日本語では身内である「課長」をソトの人物である

「客」に対し低めることでウチソト意識が徹底的に働いている。韓国語においては、このようなウチソト意識は働かないといえる。

場面がフォーマルであるにも関わらず、日本語における第三者敬語の使用率がそれほど高くないのは、第三者がその場にいないという前提も影響したものと思われる。すなわち、第三者が現場にいる場合には、目の前の第三者に対する配慮から、第三者を高める言語形式の使用率がより高くなることは容易に予想できる。

4.1.3. 会社外の場合

次は「会社外」の場面の場合をみてみよう。以下の図3をみると、第三者が「年下の上司」と「年上の部下」の場合については、聞き手が「上司」の場合は多少違いがみられるが、それ以外では日韓の差はあまりない。しかし、第三者が「上司」の場合には、日韓の差が顕著に認められ、韓国語のほうが尊敬語を使う割合が高いことが分かる。

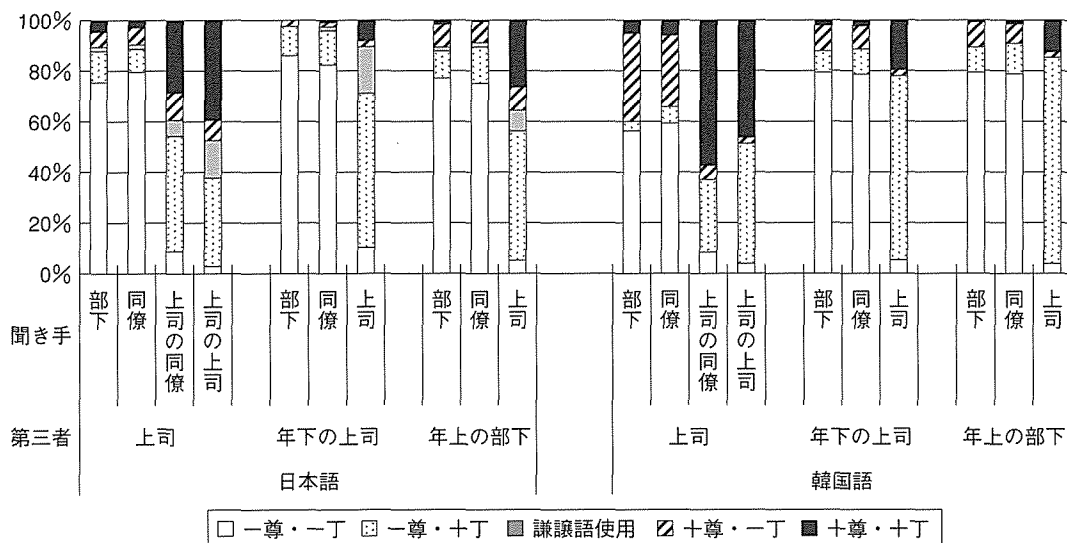


図3 第三者が「上司」、「年下の上司」、「年上の部下」の場合の日韓の聞き手別使用率

第三者が「上司」である場合に注目してみると、まず、日本語においては、聞き手が「部下」や「同僚」の場合は、第三者をほとんど高めていないが、聞き手が「上司の同僚」や「上司の上司」になると「+尊・+丁」の割合が格段に増す。これは第三者敬語が聞き手敬語に連動して現れているものと思われる点であり、これはまさに、井上(1972, 1999)が指摘した「第三者敬語の聞き手敬語化」であると考えられる。

これに対し、韓国語の場合は、聞き手が「上司の上司」の場合を除けば、第三者を高める割合が日本語よりかなり高い。聞き手の地位が「上司の同僚」から「上司の上司」へと高いほうへ変

わると、第三者敬語の使用率が低くなるのは、最上位者である「上司の上司」の前で、上位者である「上司」に対する敬語使用を抑えるという韓国語の伝統的な敬語法である「圧尊法」の影響であると考えられる。

次に、日本語において、第三者が「年下の上司」と「年上の部下」の場合をみると、「謙譲語使用」が「年下の上司」で比較的高く、「+尊・+丁」は「年上の部下」で高い。本調査の結果からは、日韓共に「年下の上司」や「年上の部下」はそれほど高めない第三者であることが分かるが、聞き手が「上司」の場合は第三者敬語が増えている。

韓国語において、第三者が「年下の上司」と「年上の部下」で、聞き手が「上司」の場合の「+尊・+丁」の使用をみると、日本語と反対に「年下の上司」のほうが「+尊・+丁」の使用率が高い。すなわち、「年下の上司」と「年上の部下」の間では、日本語では「年上の部下」のほうがより高められ、韓国語では「年下の上司」のほうがより高められている。一般に敬語の使用に関して、日本は社会的地位を、韓国は年齢を重視すると言われているが、この場面では、逆に、第三者敬語の使用について、日本語は年齢をより重視し、韓国語は社会的地位をより重視していることがわかる。このことは、対人敬語と第三者敬語で敬語使用の基準に違いがあることを示唆するものであり、今後さらに詳細な調査を行う価値がある。

4.2. 男女差

次は、男女差について考察を行う。前述のように、今回のデータでは被調査者の男女比が世代によって異なる。具体的には、20代男性と50代女性が日韓とも少ないという問題がある。従って、以下に述べることも、「男女差」なのか「世代差」なのかが必ずしもはっきりしないところがあるが、その点については適宜言及する。

まず、身内である「父」の言及においては、男女差がみられなかった。

次に、「工作中」の場面で第三者が「課長」の場合の男女差を図4に示した。

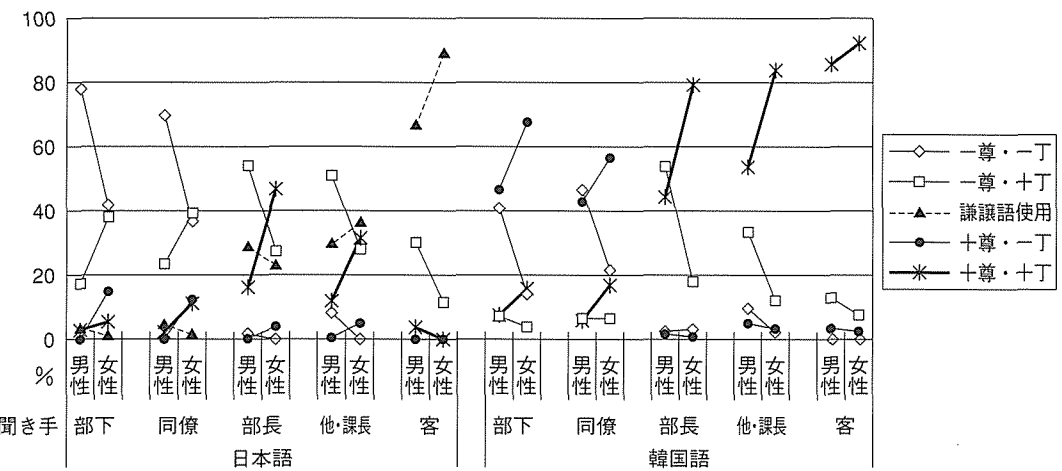


図4 第三者が「課長」の場合の日韓の男女差

まず、日本語についてみる。注目すべき点は、目上の聞き手である「部長」「他・課長」「客」に対して、「+尊・+丁」と「謙譲語使用」は全体的に女性の使用率が高く、「-尊・+丁」は男性の使用率が高いという点である。女性のほうが第三者と聞き手の両方を高める「+尊・+丁」を多用して第三者と聞き手の両方を高め、男性のほうは「-尊・+丁」を用い、聞き手だけを高める傾向が強いといえる。

これは熊井(1988)の指摘とも合致する結果である。熊井(1988)は、「話し手が聞き手に対する配慮により、話題主を上位に待遇する表現を抑制すること」を「敬語抑制」と定義し、「話し手が聞き手に対する配慮により、話題主を上位に待遇する表現を選択すること」を「敬語使用」と定義しており、男性に「敬語抑制」、女性に「敬語使用」の傾向がみられると述べている。

しかし、この結果について、男性のほうが最上位者の前で上位者に対する敬語使用を控えるべきだという従来の敬語法を守っていると解釈するか、ただ単に女性のほうが改まった表現を好むため第三者敬語も多用している、つまり「第三者敬語の聞き手敬語化」がより進行していると解釈するか、どちらが妥当かは判断しがたい。

韓国語の場合も日本語と同様に、女性のほうが第三者敬語を多用している。すなわち、「部下」「同僚」に対しては、主に「-尊・-丁」と「+尊・-丁」が使われているが、前者は男性の使用率が高く、後者は女性の使用率が高い。また、目上の聞き手である「部長」「他・課長」「客」に対しては、主に「-尊・+丁」と「+尊・+丁」が使われているが、前者は男性の使用率が高く、後者は女性の使用率が高い。聞き手が「部長」の場合は、圧尊法が使われる場面であるが、圧尊法を守っている割合は、男性は55%、女性は20%と男性のほうが圧倒的に高い。

以上をまとめてみると、「工作中」というフォーマルな場面では、日韓ともに男性のほうが、より望ましいとされる、ある意味古いタイプの敬語法を用いており、女性のほうが新しい敬語法を用いているといえる。ただし、この点については、韓国人の被調査者の男女比が世代によって異なる（男性は20代が少なく、女性は20代・30代が多い）ことと関係している可能性もある。今

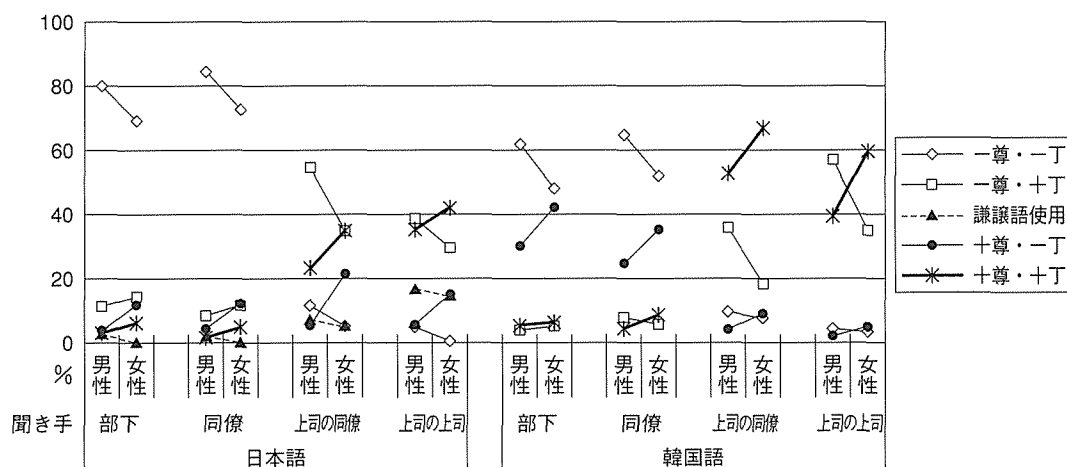


図5 第三者が「上司」の場合の日韓の男女差

後の調査による見極めが必要である。

次は、「会社外」の場面で、第三者が「上司」「年下の上司」「年上の部下」の場合である。「年下の上司」「年上の部下」の場合は男女差があまりなかったため省略し、第三者が「上司」の場合の男女差を図5に示した。

図5にみられる傾向は、基本的には図4と同様である。目上の聞き手である「上司の同僚」「上司の上司」に対して、「+尊・+丁」は女性の使用率が高く、「-尊・+丁」は男性の使用率が高いなど、日本語、韓国語とも、女性のほうが第三者敬語を多用する傾向があるといえる。韓国語では、聞き手が「上司の上司」の場合は、圧尊法が使われる場面であるが、この場面でも、男性は「-尊・+丁」の使用率が高く、女性は「+尊・+丁」の使用率が高い。この解釈については第三者が「課長」の場合と同様で、男性がより圧尊法を守っているから、とするものと、そもそも女性が敬語使用を好むから、とするものがあり得るが、どちらであるか判断するのは難しい。

4.3. 世代差

次は、日韓の世代差についてみる。ここでは、日韓で差が認められる、「会社外」の場面で第三者が「上司」の場合のみを考察の対象とする。第三者を単に「上司」とだけしているのので、被調査者の実際の職位とは関係なく、敬語使用意識を調べることができる。

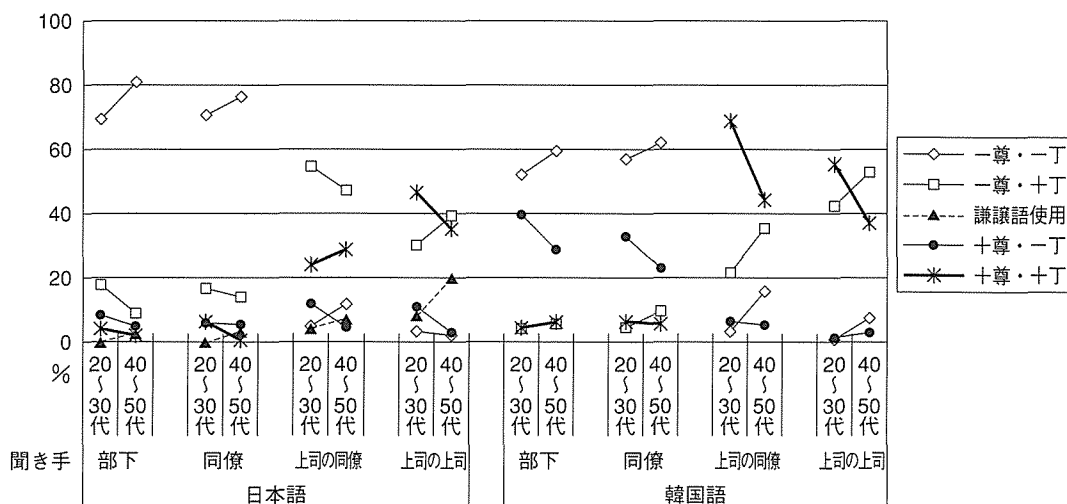


図6 第三者が「上司」の場合の日韓の男女差

まず、日本語の場合、それほど大きな違いではないが、「+尊・+丁」の使用は、聞き手が「上司の同僚」の場合は、40～50代が多く、「上司の上司」に対しては20～30代が多い。要するに40～50代はこれらの聞き手の違いによる変化が小さいが、20～30代は聞き手による違いが大きい

といえる。聞き手が「上司の上司」の場合、尊敬語使用を抑えるのが望ましいとされるが、20～30代は聞き手の地位が高くなるにつれ、第三者に対する尊敬語をより多用している。これは、若い年齢層ほど第三者敬語を聞き手敬語的に用いており、若い人ほど聞き手と第三者の両方を高める敬語法を用いているといえる。

次に、韓国語の場合をみると、20～30代が40～50代より「+尊・-丁」や「+尊・+丁」を多用している。特に聞き手が「上司の上司」の場合は、本来圧尊法が働いて、「+尊・+丁」を使わないことが期待されるが、20～30代では過半数以上の人が「+尊・+丁」を使っており、若い世代では上の世代ほど圧尊法が守られていないことが分かる。

以上をまとめると、日韓共に若い世代ほど、第三者に対する尊敬語をより多用し、聞き手と第三者の上下関係は考慮せず、二人とも上位者なら二人とも高めるという敬語法を用いていることが分かる。

ただし、このことは単に20代・30代と40代・50代とでは会社内での立場が異なるというだけのことで、言葉変化といえるものではない可能性もある。つまり、もし若い世代にみられる第三者敬語の聞き手敬語化が年齢を重ねても維持されるのであれば、これは言語変化として捉えることができるだろう。しかし、年齢を重ね、会社内での立場が変わるにつれて、第三者敬語が聞き手敬語的に用いられることがなくなるといえることになれば、現在の若い世代にみられる第三者敬語の聞き手敬語化は言語変化とは言えないことになる。この点については、今後の調査による見極めが必要である。

4.4. 第三者敬語と聞き手敬語の相関関係

次は、第三者敬語と聞き手敬語の相関関係についてみる。以下の表5は、第三者や聞き手による違いには注目せず、日韓の大まかな傾向を捉えるためにデータをより単純化したものである。すなわち、アンケートで設定した人間関係を見捨て、「-尊・-丁」「-尊・+丁」「+尊・-丁」「+尊・+丁」の回答人数とその割合を示したものである。

なお、5つの分類項目のうち、「謙譲語使用」は「-尊・+丁」に合わせて計算した。その理由は、「謙譲語使用」は第三者を低めることになるため、「-尊・+丁」に相当するものと判断したからである。

表5 第三者敬語と聞き手敬語の相関関係

聞き手 第三者	日本語				韓国語			
	高めない		高める		高めない		高める	
高めない	43	91.5	27	61.4	72	69.2	45	52.3
高める	4	8.5	17	38.6	32	30.8	41	47.7
合計	47名	100%	44名	100%	104名	100%	86名	100%

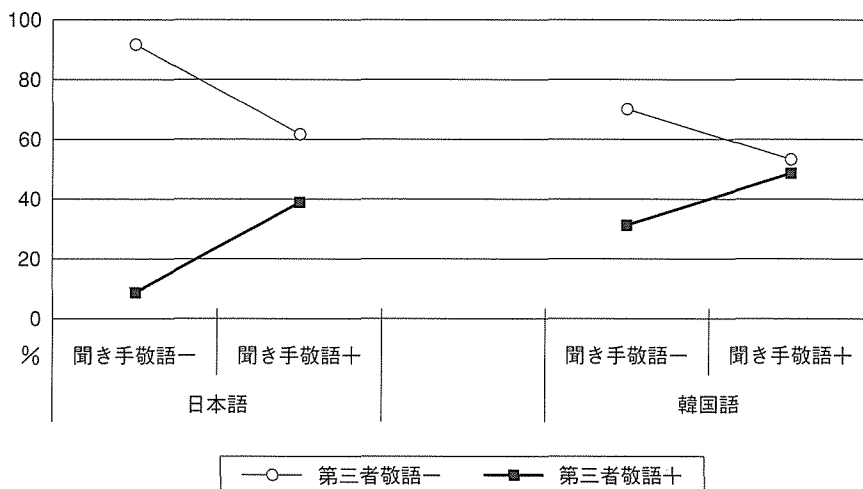


図7 第三者敬語と聞き手敬語の相関関係

図7をみると、聞き手敬語を用いない場合は第三者敬語も用いないという傾向は、韓国語よりも日本語のほうが顕著である。また、聞き手敬語を用いない場合に第三者敬語を用いる割合は、日本語よりも韓国語のほうが高い。このことは、韓国語よりも日本語のほうが「第三者敬語の聞き手敬語化」の傾向がみられるということを示唆している。ただ、韓国語の場合も、聞き手敬語を用いるときは第三者敬語の使用率が上がる。このことは、韓国語においても「第三者敬語の聞き手敬語化」がみられるということかもしれない。

5. まとめ

以上、日韓の社会人を対象としたアンケート調査を行い、聞き手の違いを含めた第三者敬語使用という観点から日韓の共通点や相違点について考察を行った。

日本語では、聞き手が同等か目下の場合は、第三者敬語があまり使われず、全体的に韓国語のほうが第三者を高める割合が高いことも明らかになった。

しかし、その一方で、韓国語で、第三者が「父」、聞き手が親しい「部下」や「同僚」の場合に、に30%の人が、通常絶対的に高められるとされる（梅田 1987）「父」を高めていないことは注目に値する。「父」に対する敬語使用も時代の変化に伴い、変化しつつあるとみられる。日本語は相対敬語が基調で、韓国語は絶対敬語が基調であるが、しかしその中でも親族に対する敬語使用においては韓国語にも相対敬語的な一面があるといえる。

さらに、韓国語における規範的な敬語法が現れるべき場面においても圧尊法を守る人は半分程度にすぎず、第三者も聞き手も両方高めてしまう新しい敬語法が使われている。これは上位者間の上下関係に関わらず、話し手にとって上位者である者はすべて絶対的に高めていることになる。素材敬語から対者敬語へと変遷してきた日本語の敬語の歴史的変化を考慮に入れると、圧尊法の崩壊も聞き手に対する配慮に起因している可能性があり、もしこのような考察が妥当であれ

ば、対人的機能を重視してきた敬語の変化の流れに合致するものであるといえる。신혜경(1993)では、圧尊法が完全に消滅したと述べているが、筆者の考えでは、完全な消滅ではなく、「現在進行中」または、「過渡期」にあると結論付けたい。

また、このような第三者をより高めるという傾向は、男性よりは女性、40～50代よりは20～30代で顕著であり、さらに日韓で共通する動きがみられた。また、これは新語・流行語の受容過程にみられる女性・若年層の積極性と相通ずるものだと考えられる。若年層におけるこのような敬語使用は今後の日韓の敬語変化の方向を予測する材料になるものであろう。

なお、第三者敬語と聞き手敬語の相関関係をみると、日本語の場合は、聞き手を高めるのに伴って第三者を高めるという、「第三者敬語の聞き手敬語化」が明らかである。これに対し、韓国語の場合は、聞き手敬語に関わらず尊敬語が用いられており、従来から言われている絶対敬語的な性格をみせていた。

以上の考察から、日本語・韓国語という言語の違いを超えて、対人敬語の優位という流れに共通性がみられることがわかった。これは、一般に広く観察される対人機能重視の方向へ進む言語変化の傾向とも無関係ではないと考えられる。今後さらに敬語使用の変化からこの点を実証的に捉えることが必要である。

注

- 1 放送関係者にはスタジオや副調整室などの現場の担当者である、PD、FD、カメラ担当、AD、放送記者やレポーターなどと、番組プロデューサーや管理・営業部門などのホワイトカラーの人々が含まれる。両者の現場の雰囲気はかなり異なるが、放送業は一般社会人より言葉に厳しい職場とも言われている。
- 2 韓国での調査と日本での1次調査では第三者の親疎を分けて尋ねたが、分析結果、第三者の親疎差はあまりみられなかったため、日本での追加調査では、第三者の親疎差は尋ねていない。また、本稿の分析の際にも第三者の親疎差は特に問わない。なお、第三者である上司の性別によっても敬語運用は異なると予想されるが、設問文の長さなどを考慮し、今回はその差については尋ねていない。
- 3 韓国語においては謙讓語が衰退し、現在は少数の語彙にしか残っていない(例:어쭙다《yeccwupta, 伺う》, 드리다《tulita, 差し上げる》, 모시다《mosita, お連れする》, 뵈다《poypta, お目にかかる》など)。調査で用いた動詞は謙讓語形式が存在しないため、韓国語においては「謙讓語使用」が現れていない。

参考文献

- 井上史雄(1972)「第三者への敬語」『国語学』90, 79, 国語学会
井上史雄(1999)『敬語はこわくない』講談社
梅田博之(1987)「韓国の敬語」『言語』16-8, 32-37, 大修館書店
荻野綱男(1980)「敬語における丁寧さの数量化－札幌における敬語調査から(2)」『国語学』120, 89-100, 国語学会
荻野綱男・金東俊・梅田博之・羅聖淑・盧顕松(1991)「日本語と韓国語の第三者に対する敬語用法

- の比較対照」『朝鮮学報』141, 7-49, 朝鮮学会
- 姜錫祐(2001)「話題にのぼる上位人物に対する敬語運用－市役所職員を対象にした調査結果から」『社会言語科学』4-1, 91-102, 社会言語科学会
- 金順任(2002)「日韓両言語における第三者敬語の対照研究－聞き手による使い分けを中心に」『言語・地域文化研究』8, 211-225, 東京外国語大学大学院 大学院博士後期課程論叢
- 金田一京助(1992)「敬語」『金田一京助全集 第三巻 国語学Ⅱ』299-499, 三省堂
- 熊井浩子(1988)「現代日本語における「敬語誘発」について－話題主に対する敬語使用と敬語抑制」『国語学』152, 31-46, 国語学会
- 全淑美(1995)「韓・日敬語用法の対照研究－話題の人物の待遇を中心に」『日本語教育』85, 66-79, 日本語教育学会
- 辻村敏樹(1992)『敬語論考』明治書院
- 永田高志(1998)「現代敬語における第三者に対する待遇表現」『文学・芸術・文化 近畿大学文学部論集』10-1, 17-39, 近畿大学
- 永田高志(2001)『第三者待遇表現史の研究』和泉書院
- 韓美卿(1982)「韓国語の敬語の用法」『講座日本語学12 外国語との対照Ⅱ』185-198, 明治書院
- 白同善(1993)「絶対敬語と相対敬語－日韓敬語法の比較」『日本語教育論集 世界の日本語教育』3, 195-207, 国際交流基金日本語教育センター
- 嶺田明美(1997)「現代女子学生の「話題の敬語」の使用の実態とその分析」『学苑』690, 53-61, 昭和女子大学
- 宮地 裕(1981)『講座日本語学9 敬語史』明治書院
- 서정수(1984)「존대법의 연구－현행 대우법의 체계와 문제점 (尊待法の研究－現行待遇法の体系と問題点)」한신문화사
- 서정수(1996)「대우법 (待遇法)」“국어문법 (国語文法)” 991-1050, 한양대학교출판원
- 신혜경(1993)「한국과 일본 직장 남성들의 대우표현 비교 연구-제 3 자 호칭과 존대사 표현용법을 중심으로 (韓日の職場の男性の待遇表現比較－第 3 者呼称と尊対詞表現用法を中心に)」“사회언어학” 장간호, 108-131, 한국사회언어학회
- 이정복(1994)「제 3 자 경어법 사용에 나타난 참여자 효과 연구 (第 3 者敬語法使用に現れた参与者効果研究)」“國語學” 24, 353-384, 國語學會

(投稿受理日: 2003年12月22日)

(最終原稿受理日: 2005年 6 月15日)

金 順任 (キム スンイム)

東京外国語大学大学院博士課程修了生

kimsoonim0518@yahoo.co.jp

A contrastive study of honorifics toward the third person of working members of society in Japan and Korea : Based on a questionnaire survey

KIM Soonim

Keywords

polite use of the respect form, absolute honorifics, relative honorifics,
restraint of the use of the respect form (*Apconpup*), honorifics toward the third person

Abstract

This study aims to clarify honorifics toward the third person based on a questionnaire survey of working members of society in Japan and Korea. The results of the survey are summarized as follows.

- (1) In the case of Japanese, honorific toward the third person is hardly used when a listener is equivalent or subordinate to the speaker, whereas in Korean, it is used at a high rate.
- (2) In the case of Korean, when the third person is the "father", 30% of the respondents did not use the respect form to their "subordinates" and "peers". I regard this as the relative honorification of absolute honorifics.
- (3) In Korean, only half of the respondents observe the standard usage, called "*Apconpep* (restraint of the use of the respect form)". This may imply that a new type of honorific usage, in which respect is shown towards both the third person and the listener, is being used. This type of honorific usage is also observed in Japanese.
- (4) The tendency to show respect to the third person is more remarkable in women than in men, and in the 20~30's than in the 40~50's in both languages.
- (5) As for the correlation between the respect form towards the third person and that towards a listener, the "polite use of the respect form", which shows respect to both the listener and the third person, is observed more remarkably in Japanese than in Korean.

This study confirms the predominance of politeness towards the listener in both Japanese and Korean as well as the similarities between the two languages in its acceptance process. This is related with the tendency of language change which progresses towards valorizing personal functions.